

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531156

研究課題名(和文) 高大接続場面における「小論文」等を契機とする文章表現の学習に関する研究

研究課題名(英文) A study of the effects of the "essay" assigned in university entrance examinations on prospective students' study of writing

研究代表者

島田 康行 (SHIMADA, Yasuyuki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90206178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「高大接続」の場面における文章表現の学習に焦点を当て、『小論文』等の文章表現の課題が高校生の学習の契機としてどのように機能しているのか、大学入学後の学生が文章表現にどのような問題を抱えているのかという二つの問題を追究し、円滑な「高大接続」のために、高校・大学の双方における有効な文章表現の指導法とはどのようにあるべきかを考察した。

また、各大学で行われている文章表現指導実践例について概観し、各大学で実施されている文章表現指導の効果や問題点の析出、整理を行った。これらの結果に基づいて、「高大接続」場面における有効な文章表現指導法の開発を試みた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the study of writing by prospective students and university freshmen. There are two questions specifically: One is how assignments such as essays in entrance examinations motivate prospective students to learn writing; the other is what problems students have in academic writing after entering university.

By exploring these two issues, the author considers what kind of writing instruction would be effective both in high school and university so that prospective students could start learning smoothly after entering university. The author also surveys each university's practice of writing instruction for freshmen and considers their effectiveness and problems.

Based on these results, the author tries to develop a method of teaching writing that targets both prospective students and university freshmen.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：高大接続 文章表現 国語

## 1. 研究開始当初の背景

申請者らは、本研究開始以前に「高大接続」のいくつかの場面を取り上げて、推薦・AO入試「志望理由書」の文章表現や、大学初年次生における語彙力、また文章表現に向かう意識など、「高大接続」において問題となる「国語」の学力に関する研究を展開してきた。その成果として、たとえば次のような論文がある。

島田康行：「志望理由書」を課すことの意義 学習材としての可能性，『大学入試研究ジャーナル』第20号 pp.151-157, 2010

渡辺哲司，島田康行：大学初年次生が文章表現に対してもつ苦手意識の分析，『大学教育学会誌』32-1, pp.108-113, 2010

島田康行：大学初年次生を対象とした読み書きの指導，『月刊国語教育研究』No.437, pp.50-57, 2008

石塚修：ソーシャルスキルとしてのリテラシー教育の必要性 - 手紙を中心に - ，桑原隆編『新しい時代のリテラシー教育』，pp.245-257, 2008

本研究はこれらの研究成果を踏まえ、一連の「高大接続」の場面における「国語」の学力の研究に、体系的なまとまりを与えようとするものと位置づけ得る。

今や、全国の70%以上の大学で、教養教育の一環として、文章を初めとする国語表現の指導が行われている。このことは、大学で求められる文章表現の力が、入学までに十分に養われていないという状況をも示すものであるが、従来、大学における文章表現の指導はさまざまな専門分野の教員によって担当されてきた経緯がある。今なお、国語教育学の立場から、大学入学後に求められる文章表現力の内容やその育成の方法などを、本格的に論じようとする動きは活発とは言いがたく、近年漸く活性化しつつあるところである。

本研究開始以前の段階では、知見の蓄積もきわめて限定された範囲に留まっており、「高大接続」という視点を導入する本研究はこの領域の研究に新たな展開を促すものと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、「高大接続」の場面における文章表現の学習に焦点を当て、『小論文』等の文章表現の課題が高校生の学習の契機としてどのように機能しているのか、大学入学後の学生が文章表現にどのような問題を抱えているのかなどの問題を明らかにすることで、円滑な「高大接続」のために、高校・大学の双方でどのような文章表現の指導が求められているのかを考え、その有効な指導法の開発に示唆を得ようとするものである。

具体的には、(1)大学進学を目指す高校生

は、文章表現をどのように学んで大学に入学するのか。(2)大学に入学した初年次生は、文章表現にどのような問題を抱えているのか。この2点に大別される問題の考察を通して、高校・大学の双方で取り組むべき文章表現の指導の在り方について考えることが目的となる。

手順は次のとおり。(1)高校における受験対策の「小論文」指導について、継続的な調査による事例研究を行う。(2)大学初年次生を対象として、実際の文章の分析と意識調査とを行う。(3)各大学で行われている文章表現指導の実践例のレビューを行う。

これらの調査から、(1)大学進学を目指す高校生が取り組む「小論文」学習の問題点を析出・整理する。(2)大学初年次生が抱える論理的文章表現の問題点を析出・整理する。(3)大学生を対象として実施されている文章表現指導の効果や問題点を析出・整理する。

以上の作業を通じて、高校生の論理的文章表現の学習における課題や問題点を明確にするとともに、それを踏まえて「高大接続」の一連のプロセス(「志望理由書」や「小論文」の執筆など)を活用した、論理的文章表現の習熟を目指す指導法の開発を試みる。

## 3. 研究の方法

以下の3つの調査研究を基盤として、高校・大学双方で取り組む、「高大接続」のプロセス(「志望理由書」や「小論文」の執筆など)を活用した、論理的文章表現の指導法の開発を試みる。

(1)高校における受験対策としての「小論文」指導等についての継続的な事例研究。

(2)大学初年次生を対象とした、実際の文章の分析と意識調査。

(3)各大学で行われている文章表現指導実践例のレビュー研究。

それぞれ具体的には次のような手法によって研究を進める。

(1)：

教科「国語」の各科目の教科書が、論理的文章表現をどのように扱っているのか、全科目の全教科書について調査を行う。特に「小論文」単元の分布を明らかにし、教科書に論理的文章表現学習のための学習材がどのように整えられているのか、整理・確認する。

副教材や模試・講座など、教科書以外に用いられる学習材が、「小論文」等の論理的文章表現をどのように扱っているのか、可能な限り広範に調査を行う。

複数の高校において、生徒が実際に論理的文章を書く学習を、どの程度の頻度、分量で行っているのか、年間を通じた実態調査を実施する。申請者の予備調査(「高等学校における文章表現の学習指導と大学入試」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第5回大会 研究発表予稿集』2010.06)によって高

校「国語」において、自分の意見を述べる論理的な文章表現をほとんど経験しないまま大学に進む学生の存在が示唆されている。これはその確認のための実態調査である。

(2) :

申請者らが担当する大学の授業において初年次生に作成させる論理的な文章をサンプルとして、段落構成、文の構造、語彙、文字表記などを観点とした分析を行う。関連して、大学初年次生の語彙力調査の新しい観点についても研究する(石塚・島田「大学初年次生は新聞が読めるか」日本国語教育学会 大学部会 2010.12)

大学初年次生が、自分の考えを述べる論理的文章表現にどのような意識をもっているか、アンケート調査を行う。申請者はすでに「大学初年次生が文章表現に対してもつ苦手意識の分析(共著)」(『大学教育学会誌』32-1、2010)によって、その意識の一端を捉える試みを行っており、本調査はさらにその詳細を明らかにするためのものである。

(3) :

日本国語教育学会、全国大学国語教育学会をはじめ、大学教育学会、高等教育学会など、複数の学術機関において、大学における文章表現指導の実践例の報告が多く見られるようになった。それらを総括することにより、現在、各大学で実施されている文章表現指導の効果や問題点を析出・整理する。

上記の各調査研究を、いずれも最終年度の平成 25 年度まで継続して実施することで、その意義を明確かつ大きなものにすることが可能となる。

#### 4. 研究成果

「研究の目的」において述べた3つの調査研究によって得られた成果の概略は以下のとおりである。

##### (1) 大学進学を目指す高校生が取り組む「小論文」学習の問題点について

高校卒業間もない大学初年次生を対象とした調査を通じて、高校「国語」の指導内容のうち「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関するいくつかの事項について、対象の大学初年次生が「あまり指導されていない」と感じていることが明らかになった。

大学の学習が、主体的に課題を設定し、調査し、議論し、考察し、発表し、研究としてまとめる、そのような一連の過程のうちにあるならば、「あまり指導されていない」各事項は、大学での学びにとって重要な、すなわち高大の教育内容がクロスする部分に位置づくものと考えられる。

そのことを、入試プロセスの全体を通して「大学での学びにはこういう知識、能力が必要だ、という具体的なメッセージ」として示すことが重要である。

そのメッセージが適切に発信されているかどうかは疑問であり、大学で学ぶ上で重要な資質や能力が「読むこと」に関する内容に偏って捉えられかねない状況も窺われる。こうした状況は早急に改善されなければならない課題である。

改訂された学習指導要領では、各教科における「言語活動の充実」が強調されている。その実施にともない、高校「国語」の指導はどう変わっていくのか、今後、調査の対象を全国の大学に広げ、観察を継続する必要がある。それによって大学入試の改革や入学後の教育にいっそう有用な情報を提供していくことが可能になるだろう。

##### (2) 大学初年次生が抱える論理的文章表現の問題点について

国内の大学新入生約 600 名を対象に、高校「国語」で経験した学習指導に関する調査を行った。その結果「話すこと・聞くこと」「書くこと」よりも「読むこと」が相対的によく学ばれていること、「言語活動」ともなうような学習は、従来、あまりなされていないことが示唆された。

この調査の質問項目に文言を利用した高等学校学習指導要領(平成 11 年告示)のうち「国語総合」の実施状況については、国立教育政策研究所による大規模調査(平成 17 年度教育課程実施状況調査)がなされているが、高校生約 15 万人を対象としたこの調査の結果、「理由や根拠を基に自分の考えを記述する問題で無回答が多い」ことが特色として指摘されるなど、「書くこと」に課題がある高校生の実態が浮かび上がった。そして「自分の考えを筋道立てて分かりやすく表現することができる力(論理的表現力)」の育成が「喫緊の課題」として位置付けられたのであった。

また、この調査では、教科の指導を担当する教師にも同時に質問紙調査が行われたが、それによると「説明や意見などを書くこと」を「指導している」と回答した教師は 98% (804 人中 788 人)に上ったが、その内容が「生徒にとって理解しにくい」ものだったと回答した教師が 22.7% (778 人中 179 人)と、「理解しやすい」ものだったという回答 23.1% (182 人)と拮抗した。

さらに、その内容が「生徒は興味を持ちにくい」ものだったと回答した教師は 40.6% (778 人中 320 人)に上り、「興味を持ちやすい」ものだったという回答 30.2% (238 人)を上回った。

これらの結果は、「説明や意見などを書くこと」について「指導はしているが、その内容には生徒にとって理解しにくい部分もあり、生徒を主体的な学びに向かわせるには至っていない」という教師の声を伝えている。大学初年次生たちが「十分に指導されていない」と感じた「書くこと」の指導について、

教師側もまた、十分ではないという認識をもっていることが分かる。

### (3) 大学生を対象として実施されている文章表現指導の効果や問題点について

大学で主体的に学ぶための能力は、言語活動を通して育成が目指される能力と、分かちがたく結びついている。そのような能力の重要性は、文・理や基礎・応用の別を問わず、各専門分野の教員が等しく認めるところであり、大学の教育プログラムの中でこれを育成するためのさまざまな模索が繰り返されている。四年制大学への進学率が五〇％を超え、個々の大学の役割は多様化しているが、今日の「知識基盤社会」に生きる人材育成のために、各大学でのこうした模索は欠かせないものとなっている。

文部科学省高等教育局「大学における教育内容等の改革状況について」によれば、初年次教育を実施する大学は増加傾向にあり、平成 20 年には全大学の 82%にあたる 595 校で実施されている。その主な取り組みは、レポート・論文の書き方等...505 校、プレゼンテーションやディスカッション等...449 校と、まさに言語活動の内容に該当するものと言える。

こうした取り組みは、高校までに言語活動を通して育成が目指される能力を、引き続き大学教育において育もうとする端的な例ということになる。

たとえば北関東に位置する A 大学には母語としての日本語に対する認識を新たにし、日本語による表現能力を高めることを目的とした共通科目「国語」が、開学当初から設置されているが、実はそれとは別に「テクニカルライティング」という科目が、ある理数系の教育組織によって独自に開設されている。各回の授業では、企画書や科学論文の作成法など科学技術に特化した内容ばかりでなく、伝わりやすい文章の発想法や構成法、また正確で効果的に伝えるための表現など、文章作成の基礎的な内容が扱われている。

さらに、大学院博士課程では、キャリア教育の一環として、「サイエンスコミュニケーション」という科目が開設されている。この授業は、研究成果を積極的に分かりやすく発信していくための文章の書き方や口頭発表の仕方などのプレゼンテーション能力、また一般社会に科学を紹介するさまざまな機会を企画・運営するコミュニケーション能力の向上などを目的としている。まさに言語活動を通して学ぶ内容ばかりである。科学技術の研究成果を一般社会に適切に伝える能力の重要性は日増しに高まっている。大学では、言語活動を重視した授業を通してその育成を図っていることが知られる。

また、近年、学生の言語活動を支援する仕組みとして、「ライティングセンター」を設置する大学が散見されるようになった。これ

にもいろいろな形態があるが、多くは日本人学生の日本語による文章作成を支援する役割を負っている。

日本における「ライティングセンター」設置の嚆矢となったある私立大学では、「自立した書き手」の育成を目指して、専門の知識をもったチューターが書き手との対話を繰り返すという手法を採っている。「自立性のある書き手」を育てることを目的として、文章の添削指導は行わないものの専任の教員や院生のチューターが個別の相談に応じるという大学はほかにもある。一方、「学生満足度の向上」を目指し、授業の課題として出されたレポートの添削指導や、就職試験のための小論文、履歴書の書き方まで個別指導するという大学もある。

このように、論理的な文章を書く学習経験が必ずしも豊かとは言えないまま大学に入学する学生のさまざまなニーズに応えようとする仕組みが、大学の事情に応じて模索されている。

### (4) まとめ

高校における「小論文」指導は、論理的思考力・表現力の育成と、進路学習とを結びつけた、教科を越えた取り組みとして定着しつつある。そうした形で行われる「小論文」の指導は、それとして意義の大きな学習であると認められる。

一方、入試対策として「小論文」が学ばれる場合も多い。「小論文」入試を、受験生の「興味・関心」や「学習意欲」「発想力」などを測るものと捉え、それを過度に意識した学習指導が行われる場合には、対象への理解が不十分なままに意見を述べることを繰り返したり、さまざまなテーマに通りの解答を準備したりするような、学習の形骸化が起こる危険をはらんでいる。

そうした中で、大学入試における「小論文」は、この 10 年の間に「意見」を書かせることの比重が低下し、「要約」を含めて課題文の理解度を測ろうとする設問が増加する傾向にある。

このことは「興味・関心」「自己表現力」「思考の柔軟性」「発想力」などの測定目標が変わって、「文章表現力」「論理的思考力」「理解力」「読解力」に焦点が絞られてきたことを意味していると考えられよう。それはすなわち、「小論文」入試に向けた学習の形骸化が進行し、受験生の「興味・関心」や「発想力」などの測定が難しくなりつつあると考えた大学が、「論理的思考力」や「読解力」などへと測定目標を移行していったということでもあろう。

国立教育政策研究所は、継続して「特定の課題に関する調査」を実施してきた。これまで、毎年一つの教科について特定のテーマを取り上げて大規模調査を行ってきたが、平成 23 年度、この調査が初めて教科の枠を超える

内容で実施された。そのテーマは「論理的な思考」であった(実際の問題と結果の分析はすべて web 上で確認できる)。

昨年来、「大学改革実行プラン」(文部科学省、平成 24 年 6 月)や「教育振興基本計画」(平成 25 年 6 月閣議決定)、「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(教育再生実行会議・第四次提言、平成 25 年 10 月)などの公表を契機として、大学入試改革があらためて社会の注目を集めている。今回の改革は、新しい達成度テストや TOEFL 等の導入などを中心に議論が進められるようであるが、「大学改革実行プラン」に現れた「思考力・判断力・知識の活用力(クリティカルシンキング)」という記述には注目しておきたい。ここでいう「クリティカルシンキング」とは、根拠や論拠を吟味して、結論に至る過程を検討し、主体的な判断をする力、批判的思考力のように解釈してよいだろう。

クリティカルシンキング(批判的思考力)は大学で学ぶために重要なものであるが、学習指導要領「国語総合」にもこれに関連した指導内容は随所に見いだせる。たとえば「出典を明示して」「引用し」「批評する文章を書いたり」すること等々、これらは批判的思考の具体的な過程の一部とも位置づけられよう。

一般に大学入試は、大学で必要となる知識や能力について、高校での学習の成果を的確に測定すると同時に、その学習を支援するようなものであることが望ましい。上に述べたような批判的思考力を育む学習の成果を適切に評価し、その学習を促すような方法が模索されていくのは自然な流れでもあろう。

筋道を立てて考え、その筋道を的確に表現したり、その筋道を吟味したりする力、またそうしようとする態度が、「多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換」を掲げる今後の大学入試改革の流れの中で、いっそう重視されていく可能性は大いにあるだろう。そうした中で「小論文」が果たす役割も少しずつ変わっていくものと思われる。

2012 年 PISA 調査(OECD 生徒の学習到達度調査)の結果では、日本の生徒(高校 1 年生)の「読解力」は参加国・地域中 4 位と、調査開始以来、最高の成績であった。彼らは、「生きる力」の育成をめざし、教育内容を厳選し、「総合的な学習の時間」を新設した旧学習指導要領(平成 10・11 年告示)による教育を、小学校から受けてきた世代である。

その彼らに対し、平成 25 年度より、新しい学習指導要領(平成 21 年告示)による教育が実施されている。言語活動の充実が強調されるこの教育課程のもとで、「書くこと」の学習はどのように変わっていくのかを注意深く見守る必要がある。

そしてその変化は、大学に入学する学生たちの「書く力」にどのような影響をもたらす

のか。今後、大学はその変化を注視し、受け入れる学生たちの「書く力」を把握するよう努め、入試や入学後の教育に活かしていかなければならない。その際、入試においても入学後の教育においても、大学での学習に必要な力を的確に見定めるとともに、高校までの学習状況を適切に踏まえることが重要となる。

以上、3 つの調査研究によって得られた成果の概要を述べた。それぞれの詳細は学会発表や雑誌論文、著書によって公表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 4 件)

島田康行、大学初年次生が経験した高校「国語」の学習内容「学習指導要領」の指導事項と実際の指導状況、大学入試研究ジャーナル、査読有、24 号、2014、印刷中

島田康行、おもしろさからたいせつさへ - 国語の豊かさを実践する授業づくり、実践国語研究、査読無、2013 年 10・11 月号、2013、11-12

島田康行、大学入試「小論文」の 10 年 - 出題傾向の変遷に関する考察 -、大学入試研究ジャーナル、査読有、22 号 2012、215-220

島田康行、大学の教育プログラムに見る「言語活動」、月刊国語教育研究、査読無、2011 年 7 月号、2011、4-9

##### [学会発表](計 5 件)

島田康行、高校・大学の双方で育てたい「書く力」、第 18 回東北大学高等教育フォーラム、2013 年 5 月 24 日、東北大学川内北キャンパス

島田康行、受験生は高校「国語」で何を学んでくるか - 「学習指導要領」の指導事項と実際の学習 -、全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 8 回大会、2013 年 6 月 7 日、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)

島田康行、話す・聞く、書く、読むために日本語の姿を見つめる、日本国語教育学会大学部会研究会、2012 年 12 月 1 日、東洋大学

島田康行、「国語の特質」をどう教えるか - 国語教育研究と日本語学研究との連携 -、全国大学国語教育学会第 123 回富山大会、2012 年 10 月 27 日、富山大学五福キャンパス

島田康行、小論文の 10 年 - 出題傾向の変遷に関する一考察 -、全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 6 回大会、2011 年 5 月 26 日、早稲田大学

〔図書〕(計2件)

東北大学高等教育開発推進センター編、  
木島明博、島田康行、他6名、東北大学  
出版会、「書く力」を伸ばす 高大接続  
における取組みと課題 、2014、225  
(7-36)

島田康行、大修館書店、「書ける」大学  
生に育てる AO 入試現場からの提言 、  
2012、191

6. 研究組織

(1)研究代表者

島田 康行 (SHIMADA, Yasuyuki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90206178

(2)研究分担者

石塚 修 (ISHIZUKA, Osamu)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10282287